

## 【参考】視察事業評価シート一覧

(資料2)

視察事業	「視察事業に対する評価」に関する意見		
	1 事業の評価に値する事項について	2 事業の改善すべき事項について	3 その他
◇トークイベント 日程: 令和6年10月26日(土) 場所: 堺市立東文化会館	<p>●文化芸術活動の「評価」について、実際に検証調査をされている方による事例の紹介、活動をされている方とそれに対して評価する立場にある方との対話、研究者による「評価」とは何かという問題提起など、具体的な事例から本質的な問題まで広く扱われた。そのため、参加者にとっては自身の問題に引きつけつつ、あらためて「評価」とは何か、評価する／されることが持つ意義、について情報を得たり考えたりする機会になったと思われる。</p> <p>また、文化芸術活動を運営し、評価される立場にある参加者の方々からの質問や意見も出され、参加者が現場の具体的な問題を共有し、それを踏まえた提言や、今後に向けた可能性が示された。たとえば、文化芸術の担当部局において、人事により役職者が変わってしまうと、活動内容について情報や意義を共有するのが難しくなってしまうという問題が示された。それに対して、実践者が活動に対する信念や「良さ」を言語化したものを蓄積し、それが共有できる場があると良いのではないかと、という話などがなされた。こうした提言は、今後も実現に向けて検討して行くべきものであると思われ、このように課題や可能性の提起がなされたことはたいへん有意義であったのではないかと考える。</p> <p>●本事業は、文化芸術活動に対する評価について、堺アーツカウンシルと公益財団法人堺市文化振興財団の共催によるトークイベントであり、関係者を含め30名程度が参加していた。文化活動とその効果(アウトカム)をどのように評価するかは、関係者(アーティスト、スタッフなどの当事者、子どもや保護者などの対象者、行政)にとって核心となる課題である一方、公開の場でそれぞれ異なる立場から議論される機会は少なかった。</p> <p>市における文化芸術活動は、「文化芸術とともに生きる」ための基盤であるため、個々の活動をどのように評価していくかについて、議論される場が設けられたことは、堺市の文化行政が深化し成熟しつつある表れであり、高く評価されるべき事業である。</p>	<p>●文化芸術活動を運営する現場での課題や可能性が示されたため、今回のような専門家によるトークイベントを受けて、次に現場の担当者が集い意見交換や事例検討をしたり、さらにそれを受けて専門家も交えた「評価」への実践的な取組に繋がる議論をしたりするような、シリーズで開催するなど連続性があるとより良いのではないかとと思われる。</p> <p>●かなり専門的な内容であるにもかかわらず、多くの参加者が集まっていたと考えられる。文化行政の現場でも求められる内容であるため、例えば、市内の文化会館や文化施設等の研修プログラムとして活用することなど検討しても良いのではないかとと思われる。</p>	<p>●文化芸術事業を評価する立場にある一人として、今回のトークイベントを視察し、これまで抱いていた問題意識に対する有益な示唆を得られました。以下にその点を記します。</p> <p>常盤氏(公益財団法人堺市文化振興財団)による「子ども食堂」での活動報告において、俳優であるアーティストが子どもたちと「フルーツバスケット」などの遊びをした際、俳優が関わることで子どもたちの遊びが変わったというエピソードを興味深うかがいました。私は日ごろから、子どもの「遊び」は、芸術活動につながる創造性や芸術を感じる感性を養ううえで大変重要であり、子どもにとって、また子どもに芸術を通して関わる大人にとって、「遊び」と「芸術」は分けられないところがあるものではないか、と考えています。</p> <p>そして、子どもの遊びを援助したり、発展させたりする専門家として、たとえば保育者やブレイリーダー等になるための専門教育を受けた人たちがいる中で、子どもの遊びに対してアーティストであればこそできることは何なのだろうか、ということに対しても関心があります。そこで今回のような子ども食堂での事例に関しても、このような「アーティストならではの」という観点から、検討していただく余地があるのではないかと思います。</p> <p>また、そうした視点に関して、中村美亜先生(九州大学)のお話も示唆に富むものでした。先生が「『ものの見方を変える』ことは、アートであればこそ、できること」という主旨のことを強調されていたからです。上記のようなことを考えていた私に取り、とても新鮮で興味を惹かれる言葉でした。</p> <p>●イベントの様子を後日youtubeにて配信するとのことで、より一層広報し、参加できなかった市民に成果を還元して頂きたい。</p>
◇さかいとあーと井戸端かいぎ(交流会) 日程: 令和6年11月20日(水) 場所: フェニーチェ堺	<p>●20代から60代まで幅広い世代の9名が参加。和やかな雰囲気の中、自己紹介から始まり、文化芸術活動での悩みなどについて活発に対話が繰り広げられた。お互いの活動に興味を向け、団体を立ち上げる際の経験談、組織作りの難しさにも話が及び、上田假奈代プログラム・ディレクターから「スタッフが気持ちよえる場を作る」ことの必要性を説くアドバイスもあった。参加者から「参考になる話を聞けた」「来て良かった」との感想も聞かれ、同様の悩みを持つ者同士の良い交流の場となったように思う。生け花をしている参加者と壁紙の端材で花を作っている参加者が、今後協力して文化芸術活動ができるのではないかと、新たな繋がりによる広がりも感じさせた。</p> <p>●補助金事業説明会から一緒に参加されているという流れもあり、交流会は和やかな雰囲気ではまった。参加者の年代も層が厚く、人前で話すことに慣れている方もまたそうでない方も、思い思いに語り、共感し、お互い尊重しあいながら展開していく素晴らしい交流会であった。上田プログラム・ディレクターも参加者の皆さんと同じく日々文化芸術活動しているアーティストとして、同じ目線で語られていたのが大変印象的であった。参加者の方々は活動歴も内容も幅広く、伝統文化芸術をされている方もいれば、ユーチューブが活動の場である方、家業の関連事業から発展させている方など様々であり、いろいろなお話が飛び出して興味深かった。話の中で、「場所を作る」を1つのテーマと掲げ、“その人らしくいられる場所”“休める場所”を文化芸術活動において大切にされている話を伺い、大変感銘を受けた。このような思いを持って活動されている方を様々な形で応援していくことは非常に意義のあることである。他にも、ご自身の感動体験が活動のきっかけとなった方もおられ、この様な場において思いを語り、他者と分かち合うことは、日々の活動から派生する副産物であると感じた。</p> <p>文化芸術活動とは、自由である反面、活動していく中で生まれ出たトラブルや悩みに対して、これが正解というものがないように思う。活動を始める段階や幅が広がっている段階など、その都度様々な困難や障害といったものが発生した場合、日々の活動の中で試行錯誤していくしか方法はない。だがこの様な交流会があれば、活動歴も様々な参加者が集まることでいろいろな体験談を聞くことができ、活動のヒントが得られやすい。そして、悩んでいるのは自分だけではないという気づきこそが、一番重要であると感じる。堺に文化芸術を根付かせるためには、参加者の募り方や盛り上げ方だけではなく、文化芸術を提供する側をいかに育てるかも重要である。そして文化芸術を花開かせるためには“継続“が必要となってくる。堺アーツカウンシルの活動と各アーティスト達との交流が、今後増々豊かに地域に根付いていく文化芸術の礎となっていくことに期待したい。</p>	<p>●1時間半の交流会のうち、参加者による自己紹介が約1時間にわたった。時間配分的に、「今日聞きたいこと」「悩んでいること」について対話する時間をもう少し増やした方が良いように思われた。参加者の一人から「ボランティアスタッフを皆さんはどうやって集めているか、聞きたい」との声があったが、時間の関係からか、その話題には触れられなかった。PD、POから何か助言があっても良かったのではないかと。</p> <p>●改善すべき点は見当たらないが、強いて言えば交流会の開催頻度と時間曜日設定であろうか。堺アーツカウンシルのメンバーの方とは個別に相談できる環境が整っているが、活動をされている方も含めて全体で交流できる機会はまだ少ないように感じる。この様な場で、抱えている悩みや将来に対しての展望など語り合うことが活動を続ける刺激となったり、新たな視点を得たりできる貴重な場になっていると思う。また今回の様に平日午後の開催であると、仕事とアーティスト活動を掛け持ちしている方は、参加しづらいと言える。堺アーツカウンシルにおかれては活動のヒントやサポートの提供のみならず、志を持つ方同志が共に安心して語り合える場の提供作りにも今後期待している。</p>	<p>●参加者の方々が、堺市文化芸術活動応援補助金について、堺市のLINEやXで知ったという声が多く、補助金事業への申請者を増やしていくためにも、SNSによる情報発信の重要性を改めて認識した。</p> <p>●現在の補助金事業は主催者への報酬となるものは一切ないが、活動を継続性のあるものにするためには、既存の仕組みについて考えてみることも大事ではないかと感じた。活動していく中で、いろいろな人との出会いが生まれ、それによって活動が発展していったといったご発言があった一方、人脈が広がっても収入につながらず、むしろ人脈が広がった分、持ち出しも増え、活動の継続が大変との意見もあった。何より、続けていける体制づくりは文化芸術を通じて都市魅力の向上をめざす上でも大切な要素であり、見過ごしたまま現場で活動する者にのみその困難を抱えさせていくのであれば、今後文化芸術の分野は先細りしていきかねない。金銭に関する設定は非常に難しいことであり、また価値ある文化芸術活動とは何かということに収益性の有無等分かりやすい指標で測るといったこともできないが、現段階の補助金事業から一歩進んだ支援展開も今後模索してみて頂きたいと感じた。</p> <p>お話を伺っていて思ったことは、活動を始めて間もない若手だけでなく、活動の経験値が高かったり、収入につながっておられる方でもそれぞれに悩みを抱えながら活動されているということであった。例えばこの場で解決できなくても、皆さんのお話を聞けておしゃべりできることで肩の荷が下りる、といった心境を述べる方がいらっしゃったことも大変心に残った。抱えている思いを自分の言葉で語り、皆でそれを傾聴し受け止め、共感したり思いを述べあったりできるこのような場は、活動を継続していく上で大変貴重であると感じた。</p>

【参考】視察事業評価シート一覧

(資料2)

視察事業	「視察事業に対する評価」に関する意見		
	1 事業の評価に値する事項について	2 事業の改善すべき事項について	3 その他
◇ワークショップスキル夏季集中講座 日程: 令和6年9月4日(水) 場所: フェニーチェ堺	<p>●ワークショップ終了後も選抜された参加者による音楽ワークショップの開催にとどまらず、勉強会などの定期開催の計画も盛り込まれるなど、ラーニングコミュニティの形成も視野に入れたプログラムとなっていること。現場における現状の課題を抽出から、将来像/ビジョンやアウトカムの設定がしっかり考えられていて、段階的に展開していく内容であることなど、専門の人材の育成とその環境整備を長期的な視点で取り組んでいることは評価に値すると考えます。</p> <p>●「音楽で人と人をつなぐ」と題されたこのワークショップ。人々が自分らしく、のびのびとすごせるような環境や関係性を構築できることを目的としている。そうしたワークショップを行えるように、受講生の音楽家が3日にわたりスキルや考え方を学ぶ。非常にハードなスケジュールではあるが、受講料が6000円とリーズナブル。その2日目、およそ20名が4チームに別れ、講師の古橋果林氏より1日目にレクチャーを受けたことをもとに、ターゲットを小学4年生に設定し、ワークショップを考え、発表する。チームそれぞれ、似通ったものもあれば、まったく違うものもあり、実演者も受け手と扮する他の受講者も真剣に、かつ楽しんでいた。受講者が様々な楽器を使うことができ、表現方法も問われないので、もし、子どもたちが実際にこのワークショップを受けることになれば、自分らしくのびのび音楽表現できそうだ。</p> <p>ワークショップ終了後、実際に学んだことを実践できる場や、仲間が交流できる場もすでに設けられてあることがとても良いと感じた。仲間が今後活動していく上で、コラボで実演することでもできるだろうし、情報交換や悩みも相談できる。今回のワークショップに終わらず、受講生が今後継続して活動しやすい環境づくりが工夫されている。また、直近の発表の場には選抜されたメンバーのみ出演とあり、報酬も用意されているので、学んだことをすぐに実践でき、受講生は目標をもって意欲的に参加できていた。</p> <p>●社会包摂事業を担うことのできるアーティストが絶対的に不足しているなか、将来的に同事業を担える人材を育成し、そのコミュニティを形成しようという事業目的が明確である。応募した受講生が満員であったことから、アーティストからの需要も多いものと理解された。ワークショップスキルは、専門的なトレーニングと実践の場を経て体得されるため、個人的なネットワークや活動、または教育の過程で身に付けることには限界がある。</p> <p>そのような現実に鑑み、文化行政という開かれた場で本講座を実施し、講座終了後も同志アーティストのコミュニティを形成し育成していくことは、主催者が取り組むべき課題を把握している証左でもあり、極めて意義のある取組である。</p> <p>以上から、堺市にとって必要な取組であり評価に値する。</p>	<p>●数時間の視察をしただけで改善点として、というわけではありませんが、3日間連続の集中講座が適切であったかどうかは、スタッフ、講師、参加者の皆さんから出た意見や課題などから、今後のより効果的なプログラムづくりにつなげていくことを期待しています。</p> <p>●改善すべき点ではないが、1日目の講師古橋氏のトレーニング方法を拝見できなかったことが残念だった。実際にお手本がどういったものなのか分からないままに、受講生の発表だったので、はっきりと掴めないまま拝見する形となった。</p> <p>このワークショップの1日目は午後からだったが、2日目、3日目は午前午後と長丁場なので、少しハードな気もした。</p> <p>トレーニングの中にあっただのかもしれないが、「子ども」とひとくくりに言っても、年齢によって理解できることや、できないことも違ってくる。また障害のある子さんへの対応で気を付けることなど、そういったことも学べる機会もあればいいのではないかと思った。</p> <p>発表の場がこども食堂という場も少し違和感がある。また、参加人数がどれほどの規模かわからないが、初めての実演にしては交通費・諸税含め1人4万円は少し高額かと感じた。</p> <p>●20名を対象に専門性の高い内容を提供するために、講師と主催者が負担や労力を顧みず取り組んでいる様子が窺われた。本事業は、堺市の文化芸術活動の現場でも、とくに「子供の居場所」を担うアーティストを育成する目的で行われるため、継続的に行われる必要がある。</p> <p>必ずしも本事業に限らないが、質の高い事業を持続的に提供するためには、それを支える人材・財源の拡充、待遇の改善が必要である。</p>	<p>●公益財団法人京都市文化芸術協会の運営するKYOTO ART CENTER（京都芸術センター）では、文化芸術に関する方々の人材バンクが古くから確立されており、例えば学校で、俳句を教わりたいとなり、アートセンターに連絡すれば、京都の俳人協会に連絡がいき、そこから講師の先生が派遣されるという非常にスムーズな流れができてしていると聞いた。今回の様なワークショップ参加者や、堺市で文化芸術に関して活動する様々なグループの登録を行えば、多種多様なワークショップに子どもたちが触れることができるのでは。</p> <p>●平日3日間の講座であるにもかかわらず、幅広い年齢層、音楽ジャンルで活動するアーティストが集まっていた(但し、女性が過半数以上を占めていた)。本事業を通じて、堺市で活動したいアーティストの発掘、ネットワークづくりにも寄与しているといえる。アーティストにとっても、年齢層や音楽ジャンルを越えたつながりを得られる貴重な機会になるものと思われる。</p>
◇アートスタートプログラム(音楽) 日程: 令和6年10月15日(火) 場所: まつのみこども園(堺市中区)	<p>●導入の段階から、演奏者と子どもたちの距離が近くなるよう工夫されていた。演奏中も、子どもたちが座っている方へ歩いて行ったり、演奏に合わせて動きで反応するよう働きかけたり、質問をしたりするなど、子どもたちが自由な雰囲気の中で能動的に音楽を体験できるプログラムであった。</p> <p>カスタネット等、子どもたちの園生活において身近な楽器も登場し、その楽器の持つ幅広い音色やリズムを体験したことは、今後の子どもたち自身による音楽活動にも刺激を与えたのではないかとと思われる。</p> <p>出演者の子どもたちに対する語りかけや、子どもたちの反応に対する受け答えが自然で、かつ臨機応変に対応していた。また、このような音楽の催しの場合、出演者には女性が多いと思われるが、今回は男性の演奏家がいたことで、子どもたちの普段の生活とより連続性のある雰囲気が作られていたと感じた。</p> <p>0歳児から2歳児、3歳児から5歳児の発達段階の違いを考慮したプログラムであった。またどちらの部でも、半分くらいが経過したところで子どもたちの動きを促す内容が取り入れられ、子どもの集中力の持続等も考慮されていた。</p> <p>園の担当者との事前打ち合わせにおいて出された、「曲によって気持ちの変化を感じてほしい」との要望に応えるプログラムであったと考える。また、園の側が「子どもたちが静かに音楽を聴く」ことのみを目的とするのではなく、このような要望を出されたという点も重要だと思われる。事前の打ち合わせで、園側から多様な要望を引き出せるような関わり方をするのが、プログラム内容を検討する上でも大事であると考ええる。</p> <p>●堺市の子どもたちが通うこども園において文化芸術活動に触れることは、将来の文化芸術活動を担う世代の育成であり、重点的方向性に直接寄与するものである。今回は、183名の児童が参加しており、プログラムも発達段階に合わせながら音楽的に質の高い内容・構成であった。出演したのは、堺市アーティストバンクの演奏家であり、彼らが市内で活動できる資質を着実に身に付けていることも同時に示されたといえる。</p>	<p>●クラリネットの音に対して、「うるさい」と言う子、耳をふさぐ仕草をする子どもたちがいた。今回の場合は、堪えられないほどのうるさいという意味ではなく音に対するリアクションの一つであると見受けられたが、発達的な特性上、音に対して過敏な子どももいる。プログラムの内容を検討する際に、そうした子どもがいるかどうか、園側から事前に情報を得ることは重要であると思われる(そのようなことはすでに考慮されていると思いつつ、情報を得ていませんので意見としてここに書かせていただきます)。</p> <p>上記のような反応に対して、演奏者が「もっとうるさくするよ」と反応した場面があった。子どもの反応に対し演奏者が自然体で応えようとしているからこそ、あるいは子どもたちに自由な雰囲気を感じてもらいたいという気持ちがあるからこそ、出された言葉だと感じた。他方、「うるさくする」よりも、子どもたちが音を大切に感じられるような、プロの演奏家ならではの表現を検討されるとより良いのではないかとと思われる。</p> <p>保育者の方々も、楽しそうに音楽に反応されている様子が見られた。保育者と一緒に楽しむことで、子どもたちにとってはより生き生きとした音楽体験になると思われる。また保育者もこのような経験を通常の保育の場につなげて行くことができるのかもしれない。</p> <p>●堺市の事業であるため、子どもたちが暮らしている街のアーティストであることを伝えてもよいのではないかと考えられる。子どもたちが、アーティストを身近な大人として親しみを感じられるようにすると一層効果的ではないかと思われた。</p> <p>また、実施園の背景にもよるが、場合によっては保護者などの関係者も参加できるようにすることで、文化芸術活動が家庭や地域の場における話題となり、相乗効果が見込まれるかもしれない。</p>	<p>●地道な活動であるが、堺市の文化芸術活動を支え育成する基盤となる事業である。これらを実施するには、事前準備(実施園、アーティスト、財団による打合せ)を経て企画立案を行い、実際の事業を実施し、実施後に振り返りをするまで、表面的には見えにくい労力が費やされている。本事業が事業目的に叶う内容となっているのは、調整役である財団や担当部署による成果である。財団にはプロフェッショナル集団として一層専門性を高めることが期待されるとともに、それらを支える環境の充実が必要と考えられる。</p>

# 【参考】視察事業評価シート一覧

(資料2)

視察事業	「視察事業に対する評価」に関する意見		
	1 事業の評価に値する事項について	2 事業の改善すべき事項について	3 その他
◇“子どものための”音楽のあるひととき Vol.17～音にふれてみよう♪～ 同時開催：夏の子どもワークショップDAY 日程：令和6年8月21日（水） 場所：フェニーチェ堺	<p>●子どもたちが演奏を聞くだけでなく、楽器作りのワークショップも行い、その楽器を使って参加型のコンサートになっていたこと、コンサートでは、子どもたちが興味を持てるように演奏する曲について分かりやすく解説され、子どもを対象にした公演として、楽しめる構成となっていた。</p> <p>「夏の子どもワークショップDAY」と同日に開催されたことで、フェニーチェ堺の施設全体が子どもで賑わっていたことは、双方の企画にとっても有効だったのではないかな。</p> <p>●開演前のワークショップ、そして演奏会と内容も充実していて、来場者も満席に近く、大成功と言える。3歳からという小さいお子さんもいる中、ざわつくこともなく大人も含め、演奏に聞き入っていたのが印象的。事前の「カズー作り」も席について作業できる範囲のものであり、口頭での説明で十分に理解でき、時間もたっぷりあり、スムーズに制作できていた。また、後で細かな作業ができるように外にテーブルも用意されていて、細かな配慮が見受けられた。大阪工業楽団の演奏者が子どもたちひとりひとりに作ったカズーを誉め、声をかけておられたことで子どもの心をしっかりと捉えておられたことも印象深い。演奏方法のレクチャーや、演奏に参加するための曲の練習もあり、子どもたちは自然と次の演奏会への期待が高まっていった。ワークショップと公演の間に少し時間があり、その間に同時開催の夏のこどもワークショップへ参加できるタイムスケジュールも上手く考えられている。実際の公演では、美しいトロンボーンの音色に聞き入り、同伴の保護者の方も楽しんでおられた。選曲も子どもに媚びたものではなく、曲の説明や音の出る仕組みの説明もあり、しっかりと学べるよう工夫されていた。そして、参加型の子どものたちのカズー演奏、生き生きと真剣なまなざしで演奏していたことが何よりの成功と言える。演奏会終わってからも、会場の外に演奏者がいらして、子どもたちと触れ合っておられたことも非常に良い余韻であった。こうした子ども時代の楽しい経験は、大人になってから大きく影響を受けるので、将来の音楽という文化活動への興味に繋がっていくだろうと思う。</p>	<p>●楽器作りのワークショップや子どもも知っている曲を演奏するなど、子どもが気軽に参加できる工夫はされていたが、コンサートとしては、もう少し楽器の種類/演奏者の数を増やして迫力のあるものにすることを検討した方がいいのではないかな。</p> <p>「夏の子どもワークショップDAY」については、子どもたちが文化芸術に触れる機会としての質の向上が必要だろう。子どもが消費者として参加するのではなく、「夏休みホール探検隊」のように、共に場を創っていくようなプログラムづくりを今後検討していく必要があるのではないかな。</p> <p>事業者や大学との連携は重要だが、事業者のコーナーはパッケージ化された商品を使っていて、営業的な印象があり、創造性は見られなかった。学生によるワークショップについても、内容とともに場の設え方など、財団のスタッフと事前に相談・検討し、より魅力的かつ質の高いプログラムや場づくりの必要性を感じた。「ダンボールお面のワークショップ」のような質の高いプログラムの開発を期待したい。</p> <p>●欲を言えば、初めに楽器の説明をされていたが、実際に演奏者がいて、楽器を演奏した方が違ったように思う。もしくは、楽器の展示だけでもあれば理解も深まったはず。また、トロンボーンとピアノだけでもこれだけの演奏ができると伝える利点もあるが、過去の大人向きのものは、4人ないし、5人の演奏者がおられたので、もっとたくさんの奏者がいれば、他の楽器も知ることができたかもしれない。また、ワークショップを大人にも参加してもらった方がもっと楽しめたのではないかなと思う。最近では意外と大人も参加したい傾向にある。後はたいしたことではないが、チラシが子ども向けの色合いではない。</p>	<p>●「夏休みホール探検隊」については、子どもが読み上げていた原稿をスタッフが作ったのか、子どもたちと作ったのか、その点については気になりました。</p>
◇きむらとしろうじんじんさん「野点inさかい利晶の杜」 日程：令和6年11月4日（月・祝） 場所：さかい利晶の杜	<p>●堺市が重点を置く「茶の湯」文化の、その拠点のひとつである「さかい利晶の杜」で、茶の湯文化の多様なあり方を示す事業が行われたことは評価に値する。また、きむらとしろうじんじん氏の存在感や、茶碗に絵付けをしている参加者の姿は、利晶の杜を訪れた人のみならず、通りがかりの人の関心も引いていた様子である。</p> <p>参加者の中には、以前から陶芸をされている方、また陶芸をしている家族と一緒に参加し、はじめて絵付けをしたという子どもさんもおられた。茶の湯と専門に関わっている方ではなくても、自身が絵付けしたばかりの茶碗で抹茶をいただくことを通して、茶の湯に親しむ機会になったと思われる点も評価できる。</p> <p>なお、参加者の中には、きむらとしろうじんじん氏の活動に以前から関心を寄せ今回も参加した方もおられた他、運営にはボランティアの方々ที่携われ、きむらとしろうじんじん氏が実践を積み重ね多くの人を惹きつけて来られたことが窺えた。今後も継続的に行うことを通して、事業の魅力が多くの人に伝わり、さまざまな人が関わる事業へと展開していく可能性があると考えらる。</p> <p>●さかい利晶の杜を初めて訪れた。堺市の文化行政に関与していながら、本文化施設のコンセプトや特色を理解しておらず、己の不明を恥じた。と同時に「さかい利晶の杜」という素敵なネイミングにも関わらず、そのコンテンツを知っている市民がどの程度いるのか、気になるところである。</p> <p>施設のコンセプトのコンテクストからして、今回の事業であるきむらとしろうじんじん氏による「野点」は、まさしくベストマッチングであった。きむらとしろうじんじん氏の活動には以前から関心があったが、参加する機会を逃してきた。</p> <p>老若男女を問わず、楽焼の絵付けを楽しみ、世界で一つしかない自分の茶碗が焼きあがるのを待つ喜びには格別なものがある。視察の到着時には、すでに用意された茶碗35個が売り切れており、その人気のほどを痛感した。出来上がった作品は多様多彩。その個性の表現には、アートにおける多様性への理解につながる驚きがあった。</p> <p>利晶の杜の指定管理者による自主事業であるが、事前に15名のボランティアへの説明会を開催し、きむらとしろうじんじん氏の活動への協力者2名や施設のスタッフ7名とともに、円滑な運営を行っていたのも印象的であった。</p> <p>きむらとしろうじんじん氏は、6月から7月にかけて素焼き400個の準備をし、秋に全国各地のツアーを行っている。今年は11カ所で野点が開催されるという。その人柄の魅力もあって年々オファーが増えているようだが、いわば競争状態の中で、毎年開催できるように、早めにスケジュールを押さえてほしいと切に願う。</p>	<p>●茶碗に絵付けをすることに対して、敷居が高い、また参加費も必然的に高くなるので気軽に参加しづらいと受け止められた可能性もあるのではないかなと思われる。</p> <p>そこで、より気軽に多様な仕方で茶の湯を楽しむという主旨のもと、絵付けは行わず、きむらとしろうじんじん氏のユニークな野点のスタイルで、きむらとしろうじんじん氏の作品である茶碗で一服いただける、という参加の仕方があっても良かったのではないかなと考える。</p> <p>また、次の週には大阪市内の会場で、今回のような野点に加え、地域の施設や大学生も関わり、子どもたちを対象にしたコーナーなども設けられるイベントが行われるという情報を伺った。本事業も、このような地域や多様な活動と連携した事業にすることで、幅広い年齢層のより多くの人々の参加につながり、茶の湯やさかい利晶の杜を軸とした文化活動の魅力、をより広く伝える事業になるのではないかなと思われる。</p> <p>●きむらとしろうじんじん氏は「各地の最高に魅力的な場所」を探して「野点」をしつらえている。絵付け、焼き釜、仕上げの用具など一切をコンパクトに収納し、各地を移動する。今回の開催場所であるさかい利晶の杜のエントランス前の歩道は幅が広く、歩行の妨げになるものとは感じられなかった。むしろ賑わいのワクワク感の演出面で有効であった。ただし、野外での開催は天候に左右される。悪天候の場合、テントなどによる対処が可能なのだろうか？改善点ではないが、気になった点である。</p>	<p>●今回の視察では、事業だけではなく施設や常設展・企画展についても詳しく解説していただきながら拝見しました。そこで、さかい利晶の杜について私見を述べたいと思います。</p> <p>これまで私は、展示やイベントへの参加のために、たびたびこの施設を訪れました。茶の湯や短歌に関するイベントや展示にはとても関心があり、それぞれ興味深い内容でした。その中で、与謝野晶子や鉄幹を巡る展示においては、堺市所蔵の資料や専門家の方々の力が生かされ、作品やその背景について深く広く知る機会となりました。</p> <p>他方、現代歌人で音楽活動などもされてきた笹公人の作品展(2016年)は、これまでの展示の中でも異色なものとして印象に残っています。笹氏は特に堺市とのつながりのある方ではないと思いますが、注目されている現代歌人の一人として、さかい利晶の杜で展示が行われたのではないかと理解しています。作品展では、笹氏の短歌だけではなく多様な創作活動が紹介され、来場者にもさまざまな関心を持った方、遠方から来られた方もおられたのではないかと想像します。展覧会会期中に、笹氏と堺市出身の堀ちえみ氏との対談や、笹氏のサイン会も行われ、私も参加しましたが多くの方が来られていたと記憶しています。</p> <p>近年、若い人たちの間でも短歌に対する関心が高く、短歌が一種の「ブーム」になっていると言われています。そこで、こうした状況を踏まえ、現代歌人に着目した展示やイベントが開催されることを期待しております。たとえば、最近第一歌集を出版し注目されている作家の町田康氏は、堺市出身でその後も堺市に隣接した大阪市内に住んでいたこともあり、このような作家に関する展示やイベントが利晶の杜で開催されれば、大きな注目を集めるのではないかと考えております。</p> <p>●民間指定管理者の職員の専門性と熱意を感じることができた。人材の採用、育成、雇用条件がどのような仕組みになっているのか、さらに知りたいと思う。</p>

【参考】視察事業評価シート一覧

(資料2)

視察事業	「視察事業に対する評価」に関する意見		
	1 事業の評価に値する事項について	2 事業の改善すべき事項について	3 その他
◇きむらとしろうじんじんさん「野点inさかい利晶の杜」 日程: 令和6年11月4日(月・祝) 場所: さかい利晶の杜	<p>●今回、野点を行ったきむらとしろうじんじん氏は、全国各地旅回りで野点茶会を開催されている方であるため、早い目にスケジュールを押さえる必要があると伺った。「堺まつり」における南宗寺さんや大仙公園での茶会が従来の定番なものであるとすれば、きむらとしろうじんじん氏の、固定概念を超えて楽しむことを大事にする自由なお茶会も、今までのものとは対極の新境地として、新たな堺の秋の定番イベントに組み込んでいくべきであると感じた。</p> <p>野点イベント来場者層は比較的若年層からミドル世代まで幅広く、共に同じ空間で楽しんでいたのが印象的であった。野点も含んだ従来の茶の湯の世界では使用しない形状・色・絵柄の茶碗を自由に創作できることは、他ではなかなか体験できないことである。型にはまらず固定概念に縛られない、陶芸家であって茶道家ではないきむらとしろうじんじん氏の魅力と彼ならではの世界観に会場全体が包まれ、参加者皆さんは秋空の下、楽しく茶碗制作過程の間に談笑したり、お茶を頂きながら他者と交流されており、事業として大成功していると感じた。</p> <p>●「さかい利晶の杜」の正面エントランス部分での開催ということもあり、充実した事業であることが確認できました。とりわけ指定管理者のスタッフが長きにわたって裏千家を習ってきていたこと、さらには20年以上にわたってアーティスト(きむらとしろうじんじん氏)の創作活動に関心を寄せてきていることもあり、どのような場が「さかい利晶の杜」に求められているか、充分な理解のもとでの企画でした。</p>	<p>●特に改善すべき事柄は見当たらないが、賑わいのある外の会場および入場ゲート前の玄関空間(お土産コーナーやジオラマ展示付近)と、有料展示スペースとの込み具合の差が少々気になった。リピーター創出や新しいファンを獲得する展開も是非模索して頂きたい。</p> <p>実際に来館して頂くのが一番であるが、まずは与謝野晶子と千利休の生涯に興味を持っていただける様、HP上に仕掛けをして発信しても良いと思う。</p> <p>2階展示室にはカテゴリー別に分けられた、印象的な晶子の言葉に触れられるコーナーがある。パネル操作で興味のあるカテゴリーの言葉が出てきて楽しい仕掛けではあるが、沢山あるために全ての言葉を味わい尽くすことは残念ながらかなり難しい。晶子は多くの著作を残しているにもかかわらず、図書館および書店で容易く目にする機会もなく、晶子の思いに触れる機会は意外に少ない。激動の人生を送った晶子ならではの思いや言葉は、時代を経てもなお色あせることなく、今の時代を生きる私たちの心に相当響くものがあると思っている。HP閲覧者に晶子の思いに触れて興味を持ってもらうため、例えば週に1つ紹介する「今週の晶子のことば」や、おみくじ的にランダムに言葉が出てくるような仕掛けがあると面白いのではないだろうか。また千利休においても、「利休百首」と言われる、利休の茶の湯に関する教えを後世に伝える言葉があるが、これは決して茶道家しか参考にならないというものばかりでなく、現代に生きる我々一般の社会生活に通じるものもある。茶筌の使い方の茶碗を回して飲む意味など茶の湯に取っ付きにくさを感じる方でも、社会生活に即した事柄を学芸員さんや堺で活動する茶道家の方々が分かりやすい解説を添えて届ければ、きっと身近に感じるもらえるきっかけになると思う。施設紹介やイベント発信といったありきたりな構成だけでは、他館との差別化はできない。魅力的なイベントと企画展のみならず、「さかい利晶の杜」でしか発信できない唯一無二なHP作りにも期待していきたい。</p> <p>●アーティスト(きむらとしろうじんじん氏)による取組内容が盤石に定まっていることもあり、いかにして誘致した側での独自性を出すことができるかが課題と受け止めました。もちろん、無理に独自性を出さない、という誘致の仕方もある中で、後述する公募によるサポートスタッフにより、前回には実施されたなかった「ありがとう茶会」が実施されたことは、今後の試金石となるでしょう。なお、小さな改善可能性として、「ありがとう茶会」が野点(絵付け・お抹茶)の場所から独立してしまっている印象がありました。正面入口側だけでなく自転車置場の出入口を利用する方も関心が向きやすくなる導線も考慮できたでしょう。</p>	<p>●「さかい利晶の杜」は堺の中心部にあり、現在はこの地の利を活かして企画展やイベント関連の集客は成功していると思われる。しかし一方で、コロナ禍明けの来館者数をみても、リピーターの伸びが今後懸念される。さかい利晶の杜のこれからの活用方法として、企画展とイベントおよび貸出以外の新たな軸として、継続して学べる場としての活用を是非とも検討して頂きたい。来館者の中には、施設スタッフの方に茶の湯を学びたいとの意思表示をされる方もいると伺った。このようなケースに対しては、親切にも外部茶道家に紹介する等、学びの場を紹介し来館者のご意向を汲み取るご努力をされていた。だが一般的に言って近年では、指導者の高齢化により(またそれに伴い、WEBを使っでの効果的な教室案内をする技術がないことも深刻である)、学校クラブ・駅前や百貨店の中の文化教室以外において茶の湯を学べる場所が減少している。加えて、許状を取得しても資金面等あらゆるハードルにより開業に踏み切れない茶道家もいて新規参入も少ない。このような現状ではいくらさかい利晶の杜で思い出深い時間を過ごせても、「堺茶の湯まちづくり条例」の理念が完全達成しているとは言い難く、特に前文にある「茶の湯を楽しむ文化が大切に育まれてきた堺を誇りに思うとともに、これを次世代に引き継いでいかなければならない。」という言葉は理想を描いているだけとなる。現時点より今後を見据えて条例の理念を実現すべく、さかい利晶の杜において希望者にリーズナブルな条件で初級の学びを提供する場の創設が必要ではないだろうか。前例がない・難しそうだからダメだと考えもしないままでは、何も変えられない。小さな一歩でも進めてみるのが大切だと感じる。学びたい人と教えたい人(若手茶道家の育成)という需要と供給の観点、抹茶や菓子といった茶の湯関連産業に携わる地元企業の活性化、そして市としても文化芸術を通じて魅力発信を促進する機会となりうるのではないか。人的・産業的資源の発掘・発展と、堺に集う方々の豊かな心の醸成につながっていったらと切に願う。</p> <p>施設の利用形態については、大広間の使い方がユニークであると感じた。茶の湯関連に限ることなく、幅広いジャンルに対し貸し出され、来館者層を広げることに寄与していると思う。</p> <p>会場を見渡していると、たまたま初めて一緒する方でもお茶を通じてお話が弾む温かみのある雰囲気であったと思う。茶の湯は一期一会の心を持って、相手を思いやり一座建立することを良しとする文化である。今回の事業評価である「多くの人に魅力を伝える」視点からは外れるが、他の広域自治体では、自治体が関わる婚活イベントにおいて茶の湯体験を提供するものもあった。現時点で堺市が関与する婚活施策はないようだが、子育て施策とも関わってくるものでもあり、堺に住みたいと選ばれる自治体を維持するためにも、今後都市魅力向上の一環としてさかい利晶の杜で婚活イベントを行っても面白いかもしれない。</p> <p>●「さかい利晶の杜」として、「利」の部分に接近する具体的な部分だとすれば、「晶」の部分での取組として(詩人であって歌人ではない、と見立てられる可能性があるものの)堺アーツカウンシル上田假奈代プログラム・ディレクターが貢献できる可能性もあるのではないのでしょうか。実際、きむらとしろうじんじん氏と上田プログラム・ディレクターとは交流があるため、堺独自の展開、あるいは「さかい利晶の杜」の自主事業の幅が広がりうる余地があるかと思われます。</p>